

Title	<書評> 苅谷康太 『イスラームの宗教的・知的連関網：アラビア語著作から読み解く西アフリカ』 東京大学出版会, 2012年, ix+348頁
Author(s)	坂井, 信三
Citation	イスラーム世界研究 : Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies (2013), 6: 580-582
Issue Date	2013-03
URL	https://doi.org/10.14989/173266
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

荻谷康太『イスラームの宗教的・知的連関網——アラビア語著作から読み解く西アフリカ』東京大学出版会 2012年 ix+348頁

本書は、西アフリカにおけるイスラームの存在様態を、歴史的にも地理的にも広大な広がりをもつイスラーム知識人たちの知的・宗教的活動をとおして、しかも現地で筆写または執筆され、参照され、教授されてきたアラビア語宗教文献の読解から描き出したもので、日本人の手になるその種の研究としてははじめてのものである。

日本における西アフリカのイスラーム研究は、これまで評者も含めて主に人類学者によって担われてきた。日本では、東洋史／西洋史という区分のためにアフリカのイスラーム研究を固有に担う研究者が育ちにくく、結果として人類学分野のアフリカニストがそれを担ってきたという経緯がある。だが本書の冒頭で著者も指摘しているとおり、人類学者によるイスラーム研究は参与観察による民族誌的研究という利点をもちながら、同時に大きな限界を抱えていた。それは研究対象が特定の民族集団や地域に限定されることと、ムスリムの社会にとって本質的に重要なアラビア語文書資料へのアクセスが困難になりがちなことである。この二つの欠点は相関している。つまり現地の人々が参照しているアラビア語文献に目を向けるなら、イスラームの歴史的・地理的な広がりがいやが応にも見えて来るはずだからである。そうした意味で、荻谷氏の研究は日本における従来の西アフリカ・イスラーム研究の限界を乗り越えるものとして、まずは評価することができる。

以下に本書の目次を示し、各部を要約しながら評価を試みよう。

目次

はじめに

序章 西アフリカにおけるイスラームの展開

第I部 西アフリカにおけるイスラームの教団的枠組み

第1章 伝統の道——スィーディー・アル・ムフタルとカーディリー教団

第2章 新興の道——ムハンマド・アル・ハーフィズとカーディリー教団

第3章 単一の道——ムハンマド・アル・ファーディルとその道統

小結

第II部 西アフリカにおけるイスラームの宗教的・知的連関網

第4章 信仰と知——アフマド・バンバの若年期

第5章 直接的関係

第6章 間接的關係

結語

補遺 ムリッド教団のウィルド

「はじめに」で著者は先行研究をふり返りながら、本研究の課題を(1)教団的枠組みの相対化、(2)スーダン西部と他地域との連関の解明、(3)アラビア語著作の分析による情報の蒐集・整理・蓄積の三つにまとめている。

西アフリカ・イスラーム社会の宗教知識人たちがほとんど例外なく特定の教団に所属していることは事実である。植民地下でのムスリム管理体制に結びついたイスラーム研究の影響もあって、従来の西アフリカ・イスラーム研究はそうした教団的構造にそっておこなわれてきた。だが、著者

は現地に流布するアラビア語文献を渉猟する過程で、「西アフリカのイスラーム宗教知識人たちが、そうした教团的構造の更に一段下に、宗教的・知的情報を交換する基層部分を共有しているのではないか、そして、西アフリカ・イスラームのより実態に近い像とは、そうした基層部分の上に教团的構造が乗っている姿なのではないか」(p.12)と考えるようになり(1)、そこから宗教知識人たちの活動をより広い知的宗教的空間に位置づける必要(2)が認識され、それを実行するための実践的課題(3)が浮かび上がってきた、ということである。

つづく本論の部分は大きく二部からなっている。本書の中心は植民地下セネガルで成立したムリッド教団の開祖アフマド・バンバの知的・宗教的活動を取り扱う第Ⅱ部にあるが、それに先だって、第Ⅰ部はバンバの宗教的学問的自己形成のバックグラウンドとなった三人の宗教知識人の活動を取り扱う。つまりまず第Ⅰ部で、それらの宗教知識人がそれぞれに別個の教団のキーパーソンでありながら、「教团的枠組みの垣根を越えて直接に交流し、複数の著作を知的基盤として共有」(p.187)していたことを描き出し、その上で第Ⅱ部において、そうした広がりをもつ宗教知識人たちの著作活動がアフマド・バンバというひとりの宗教知識人に向かって流れこみ、ムリッド教団の開設に結びついていく様相を描き出す、という構想になっているわけである。

第Ⅰ部で著者は、スィーディー・アル・ムフタル、ムハンマド・アル・ハーフィズ、ムハンマド・アル・ファーディルという18世紀～19世紀のスーダーン西部および西サハラの代表的な宗教知識人の学問的・宗教的知識の継承関係を、アラビア語刊本や主要なイスラーム図書館に所蔵される写本の分析によって跡づけている。この部分は既存のイスラーム研究にとくに新しい知見をもたらすものではないが、記述のほとんどすべてがアラビア語文献に依拠しているので、今後西アフリカ・イスラーム研究者にとって貴重な情報の整理として活用できるだろう。

それに対してアフマド・バンバを扱う第Ⅱ部は、オリジナルな重要な指摘を含んでいる。バンバの興したムリッド教団については、植民地状況下で換金作物生産の労働と来世での救済を結合する教義を生み出した、サハラ以南アフリカの独自の教団という見方が一般になされてきた。ただ最近では、そうしたイメージの背景に、サハラ以南の黒アフリカ植民地を中東・北アフリカのイスラーム世界から分離して管理しようとしたフランスの「イスラーム・ノアール」政策があることは認識されるようになってきている。それに対して著者は、これまでのムリッド教団研究がほとんど参照してこなかったバンバの膨大なアラビア語著作に接近し、そのいくつかを詳細に読解していくことによって、彼の宗教思想が、上記の三人の宗教知識人やその他多くの著作をとおして、イスラーム世界の広大な知的・宗教的伝統から汲み上げられたものであることを示し、「彼ら〔上記三人とバンバ〕が、多様な時代・地域の先達から受容した様々な知識」を、「西アフリカの知的体系に有機的に組み込むことに成功していた」(p.296)ことを明らかにしようとしている。

たとえばバンバのいくつかの著作は、一読すると「不可思議な呪術的文言に満たされた」(p.263)文書のような印象を与えるが、それは多くの宗教著作から引き出された引用集であり、当時の一般のムスリムが日常生活で巻き込まれるさまざまな事態に際して、「即座に実行できる簡便な対処法として、具体的な祈禱法や護符の使用法」を紹介しているのであり、「この地域の宗教知識人が地域内外に広く張り巡らされた宗教的・知的連関網の中で活動し、その知的遺産を享受」していたことを示しているという。

とくに興味深いのは、ムリッド教団の「労働の教義」の根拠に関する検証である。著者はまず、バンバの著作『楽園の道』に含まれる数行の詩行にその根拠を求めたダカールの黒アフリカ基礎研究所のアマル・サンブによる研究を紹介する。サンブはその詩行を「知識と労働とが、確実に幸福

へと繋がる二つの道であることを知れ」と翻訳し、そこに「労働の教義」の表明を見た。それに対して著者は、原文にある‘amalをサンブのように「労働」と訳す必然性はないこと、もともと『楽園の道』は西アフリカのムスリムの間で広く参照されてきたヤダーリーの著作『タサウフの封印』を韻文に再編集したものであり、もとのテキストに遡って、バンバは内面的な知識 (taṣawwuf) に対する外面的な宗教行為 (‘ibāda) の言い換えとして韻律上の理由から ‘amal を用いたことを明らかにして、サンブが既存のムリッド教団への先入観をテキストに読み込んでしまった結果、この一節を「労働の教義」の根柢とみなしてしまったことを指摘している。

もちろん著者自身慎重に指摘しているとおり、こうした文献学的な検証は、事実としてムリッド教団の信徒たちのあいだに流布している「労働の教義」を否認するためになされているのではない。そうではなく、流布しているイメージをもって宗教文献を読むことが、「特異な思想体系の萌芽を捏造したりする事態に繋がらうる」(p.296) ことを指摘し、宗教文献はそれ固有の「宗教的・知的関連網」の中に位置づけて読み解かなければならないことを明らかにしているのである。アラビア語文献の精読をとおしたこのような指摘は、西アフリカの歴史研究者、あるいは人類学者にとってきわめて貴重なものであると思う。

以上のとおり、本研究で著者が意図した「イスラームの宗教的・知的関連網」の描出という目標は十分な成果を上げているといえよう。若い著者のキャリアの第一歩として、その成功を祝したい。ただひとつ歴史人類学者として、以下の指摘をしておこう。本書で著者は過去に向かって「イスラームの宗教的・知的関連網」をたどる文献学的方法を取った。だがバンバの活動自体はフランス植民地支配下でおこなわれたものである。異教徒による植民地支配、流刑、監視、そうした状況下で彼は膨大な著作の執筆に励んだわけだが、それは同時代における宗教的实践として、何を目指し、何を実現しようとするものだったのだろうか。またそれは同時代のセネガル人ムスリムやフランス植民地勢力にとって、何を意味したのだろうか。そうした点に目を向けるとき、文献的に根柢づけられない「労働の教義」が多くの信徒に信奉されたという事態の重要さが、あらためて問われることになるだろう。そうしたところこそ、解明すべき西アフリカ・イスラームの歴史的事実があるのではないだろうか。著者の今後の研究に大いに期待したいところである。

(坂井 信三 南山大学人文学部教授)

長沢栄治『アラブ革命の遺産——エジプトのユダヤ系マルクス主義者とシオニズム』平凡社 2012年 606頁

20世紀のエジプトにとって民族主義とは何であったのか。一般的にはナセル体制で頂点に達するアラブ民族主義の雄として、果敢に欧米の帝国主義と闘う姿が想起されるだろう。また、シオニズム＝イスラエルとの闘争もその重要な要素である。

もう一つ、一般的に想起されることとして、アラブの民族主義といえ、郷土愛であるワタニーヤ(エジプトの場合はエジプト一国ナショナリズム)とアラブ民族の連帯を意味するカウミーヤの二種類がある。エジプトの1950年代とは、欧米やシオニズムという好敵手に対して、エジプト愛とアラブ愛が折り重なった時代である。

1952年に結実する7月革命の前史を担った二人のユダヤ系共産主義者に焦点を当てた本書は、